
(仮称) 第3次宇都宮市緑の基本計画

素案

—2022.11.11 版—

目次

緑の役割.....	1
序章 はじめに.....	8
1 計画策定の背景と目的.....	9
2 計画の位置付け.....	10
第1章 緑の現況と課題.....	12
1 緑の形成史.....	13
2 緑の構造.....	15
3 緑被の状況.....	17
4 種別の緑の状況.....	19
5 機能別にみる緑の状況.....	23
6 前計画の目標達成状況.....	28
7 計画改定の課題.....	29
第2章 基本理念.....	32
1 基本理念.....	33
2 多様な主体の参画による緑のまちづくり.....	35
3 スーパースマートシティと緑.....	36
第3章 緑のまちづくりビジョン.....	40
1 緑の将来像.....	41
2 基本方針.....	43
3 目標指標.....	51
第4章 ビジョン実現のための取組展開.....	52
1 重点プロジェクト.....	55
プロジェクトⅠ 緑による中心市街地の魅力向上.....	57
プロジェクトⅡ 地域特性とニーズに応じた公園機能の充実.....	61
プロジェクトⅢ 緑とのふれあいの場としての農地・樹林地の活用.....	65
2 基本方針に基づく施策.....	69
3 計画推進に関する配慮事項.....	77
第5章 地域別方針.....	88
1 北西部地域.....	90
2 北東部地域.....	94
3 中央地域.....	98
4 東部地域.....	102
5 南部地域.....	106
第6章 計画の進行管理.....	110
1 施策の状況把握と改善.....	111
2 施策のモニタリング.....	112
資料編.....	113
1 計画策定体制・策定経緯.....	114
2 緑を取り巻く環境の変化.....	117
3 宇都宮市の緑の現況と課題.....	131
4 市民意識.....	142
5 用語解説.....	147

緑の役割



緑は、人々が屋外で過ごす機会や場、居心地がよく歩きたくなる空間を提供します。また、緑を通じて、まちに人や企業を呼び込み、新たな街の顔がつけられます。

まちの魅力を高め、
賑わいを生む

写真は仮



公園などの緑は、家族で遊ぶ子育ての場、仲間と身体を動かす健康づくりの場となります。まちなかに木陰があると、涼しく過ごすことができます。

暮らしに、憩いとするおいを

写真は仮



森林・樹林地や農地は、人々の生活に欠かせない生産の場として地域の経済や暮らしを支えます。山々を背景に農地が広がる里地里山の風景は、宇都宮を代表する景観です。

地域の暮らしを支え、
独自の景観をつくりだす

写真は仮



丘陵の南端に鎮座する二荒山神社が、宇都宮の起源です。その周りに人が集まり、まちができ、本市は北関東の経済・文化の中心都市になりました。今でも多くの市民が参拝に訪れ、お祭りは活気に満ちています。

歴史をものがたり、
誇りと愛着を育む

写真は仮



市内の豊かな自然環境は、貴重な野生生物のすみかとなるほか、観光や学習等の場面で人々と生き物を繋ぐ場所ともなります。水や木材等の資源の供給や、土砂災害の軽減など、生物多様性の恵みをもたらします。

生きもののすみかとなり、
生物多様性を育む



樹林地の保全活動, 観察会, まちなかの花づくりなど, 緑を介して, 様々な世代や立場の人々の関わりが生まれます。

人とみどり,
人と人をつなぐ

写真は仮

序 章 はじめに

序章 はじめに

1 計画策定の背景と目的

わたしたちのふるさと宇都宮市は、関東平野の北端と日光連山から連なる山地との境に位置しています。鬼怒川、田川、姿川等の河川が流れ、その間に形成された台地に、市街地が広がっています。北部の山地から延びる丘陵の先端部に二荒山神社が位置し、中世から現代に至るまで、本市の中心地となっています。このように宇都宮は、水と緑が市街地を取り囲み、都市活動と自然とのふれあいが共存するまちとして、発展を続けてきました。

これまで本市は、緑の保全と創出の総合的な計画である「緑の基本計画」を約20年間にわたり運用し、その結果、山林等の豊かな緑の保全、都市部における公園の増加など一定の成果を挙げてきました。一方で、農林業従事者や、公園緑地の保全・維持管理を担う市民活動への参加者の減少・高齢化等、将来的な緑の取組推進に不安が生じている状況でもあります。

本市は現在、大きな転換点を迎えています。地球環境問題の深刻化、ヒートアイランド現象による都市生活の快適性の低下、激甚化・頻発化する豪雨災害被害など、本市の持続的な発展を脅かす課題がいくつも存在しています。さらに、これまで増え続けてきた人口は、平成29（2017）年の約52万人をピークに減少局面を迎えました。こうした中、本市は、本格化する人口減少社会においても、市が人や企業から選ばれ、将来にわたり発展し、世界共通の目標であるSDGsに貢献する、子どもから高齢者まで、誰もが豊かで便利に安心して暮らすことができ、夢や希望がかなうまち「スーパースマートシティ」の実現を、目指すべき将来像として掲げました。

新たな時代の本市において、緑施策の役割と期待は大きく高まっています。担い手が減少する中で、これまで以上に市民、事業者、行政が一体となって、緑の保全・活用・創出に取り組んでいくことが重要です。さらに、「スーパースマートシティ」の実現に向けて、緑が有する多様な機能が適切に発揮されるよう、まちづくりの諸分野と連携しながら、多角的かつ戦略的に取組を展開していくことが必要です。

本市のまちづくりに関わる多くの人と、緑の取組の方向性を共有し、連携しながら取組を推進するため、緑の将来像や基本方針、具体的な施策展開等を定めた「(仮称)第3次宇都宮市緑の基本計画」を策定しました。

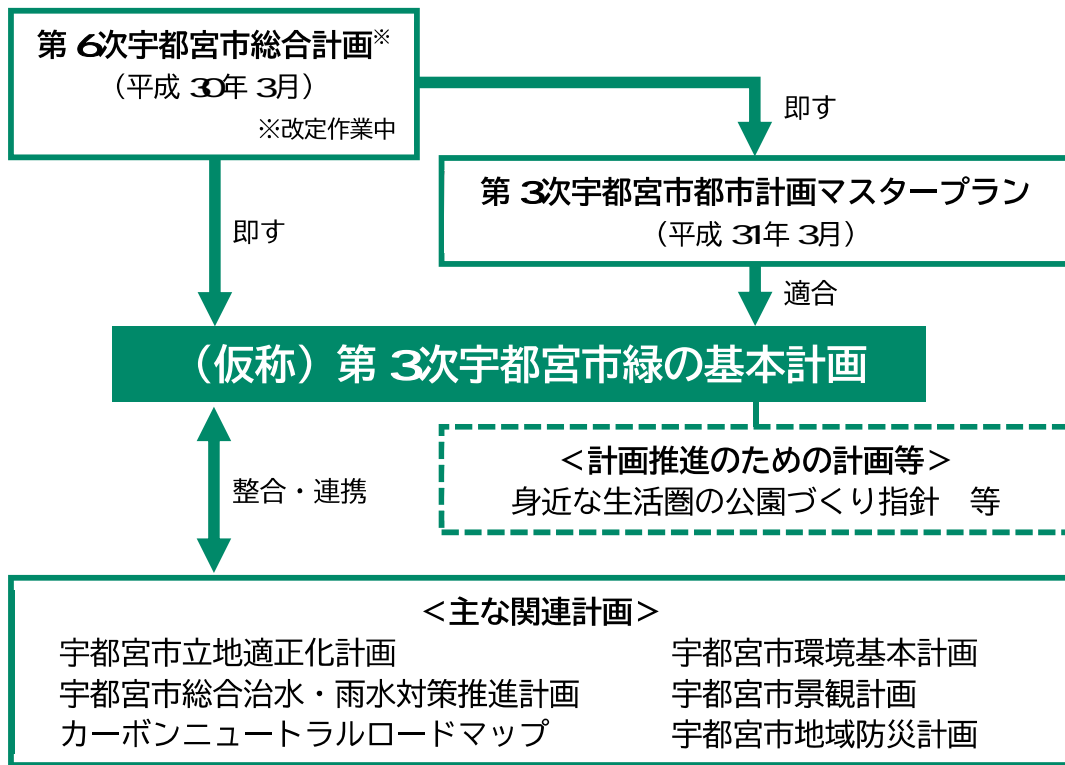
2 計画の位置付け

(1) 緑の基本計画とは

「緑の基本計画」とは、都市緑地法第4条に基づき、市町村がその区域内における緑地の適正な保全及び緑化の推進に関する取組を総合的かつ計画的に実施するために定めるものであり、その目標と実現のための施策等を内容とする緑とオープンスペースの総合的な計画です。

(2) 計画の位置づけ

本計画は、宇都宮市総合計画に基づき、快適な住環境と自然豊かな都市環境の創出を図るための個別計画に位置付けています。



計画の位置付け

(3) 計画期間

本計画の計画期間は令和5（2023）年から令和14（2032）年の10年間と定め、目標年次を令和14（2032）年とします。

(4) 計画対象範囲

本計画の計画対象範囲を宇都宮市全域とします。

(5) 対象とする緑

緑の基本計画において、「緑」は、樹林地や街路樹、農地、草花、芝生、河川や池沼等の水面など全ての緑を対象とします。したがって、公園や道路など、公共施設における緑のほか、民有地の庭や花壇等の緑も含んでいます。



対象とする緑の範囲

出典：第2次宇都宮市緑の基本計画

第1章 緑の現況と課題

第1章 緑の現況と課題

1 緑の形成史

● 原始・古代 ～現代につながる緑の骨格の形成～



宇都宮二荒山神社

- ・約1500万年前、海底火山噴火による火山灰が海底に堆積し大谷石層が形成。
- ・弥生時代後期、雀の宮を中心に田川・姿川とその支流の広い平野に小規模な稲作を営む集落が形成。
- ・約1600年前、「下之宮」の地に豊城入彦命を祀ったことを起源に宇都宮二荒山神社が創建され、838年に、宇都宮丘陵の南端にあたる現在の場所に移設。

● 中世・近世 ～二荒山神社を中心とするまちの形成～



白沢宿

- ・奈良・平安時代、宇都宮二荒山神社の門前が中心的なまちとして発展。門前町のさらに南に、宇都宮城の城下町が形成。
- ・江戸時代、近世城下町の整備、日光街道・奥州街道の付け替えが行われ、現在の市街地の骨格が形成。
- ・江戸時代末期、農村部で新田開発の動きが活発化し、徳次郎や宝木地区に肥沃な田園地帯が形成。

● 近代～昭和 ～変化するまちづくりの中で緑の喪失と創出を経験～



大通り沿いの街路樹

- ・東北本線開通、宇都宮駅開設により、東西に延びる現在の中心市街地が形成。
- ・戦時、空襲によって緑が消失するも、戦後復興の土地区画整理により、公園や街路樹を整備。
- ・その後、合併を経て、近代的な商業都市を形成。

● 現代 ～都市と自然のバランスがとれた中核都市～



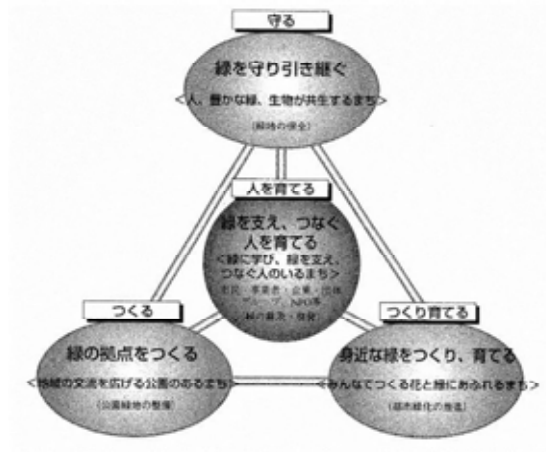
馬車道ヤードの様子

写真出典：「都心部における道路空間を活用した社会実験（BASHAM ICHIYARD）実施結果概要」（宇都宮市・宇都宮大学）

これまでの緑の基本計画

宇都宮市では、都市化の進展に伴う緑の減少が進む中において、2002年に、第1次となる緑の基本計画を策定しました。第1次計画は、「人と緑の調和」を大きなテーマとし、当時から、緑の多様な機能を生かしていく考え方が示されていました。

その後、将来的な人口減少が予測される中で、2008年に策定した総合計画の将来都市構造にネットワーク型コンパクトシティを掲げ、その実現への貢献を目指して、2011年に第2次緑の基本計画を策定しました。第2次計画では、将来像の視点に「緑のネットワーク形成」が加わり、基本目標には、緑によって課題を解決し、安心して快適に暮らしていけるまちの実現を目指す考え方が示されました。



第1次計画の緑の将来像イメージ



第2次計画の緑の将来像イメージ

2 緑の構造

広域的にみる本市の緑

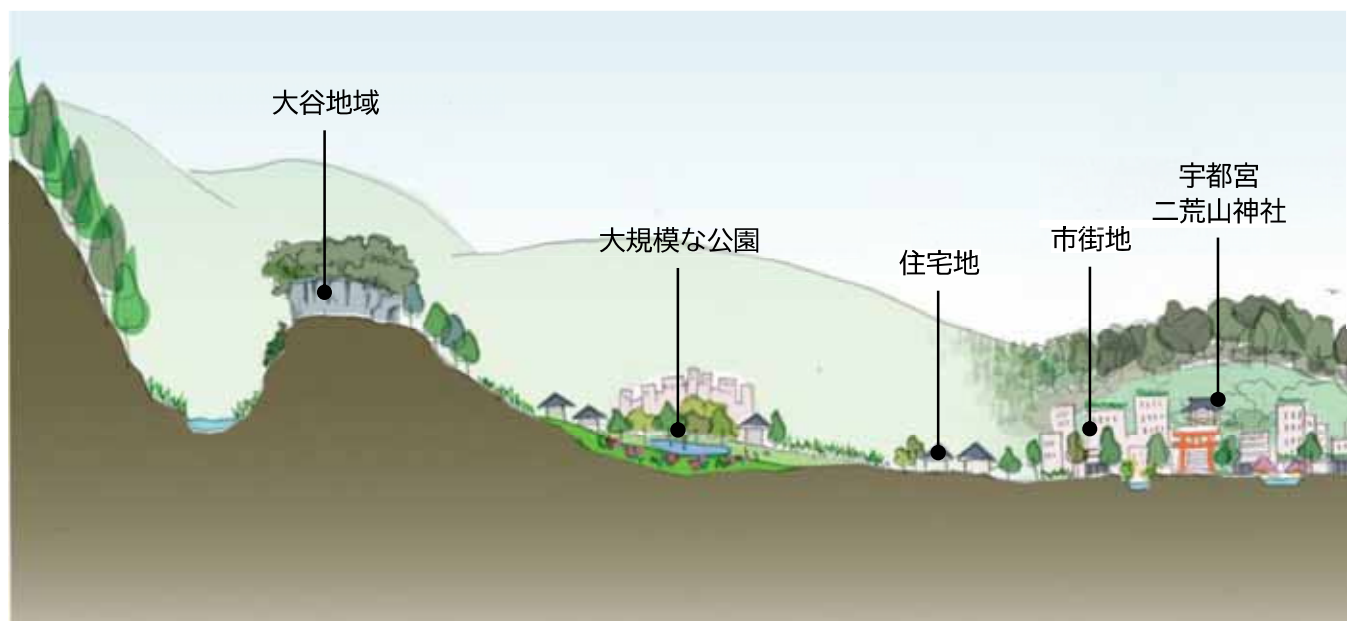
本市は東京から北に100km、栃木県のほぼ中央に位置しています。

市内北西部には日光連山から続く丘陵地や扇状地が分布し、なだらかな山地となっています。市内中央部の北部には、丘陵地がくさび状位置しており、その周辺部は数段の洪積台地と沖積低地からなる平地となっています。南部には、関東平野の北端にあたる平野が広がっています。宇都宮市は日光連山から連なる山地と関東平野の北端の境に位置する里山都市と呼ばれています。

本市の緑の構造

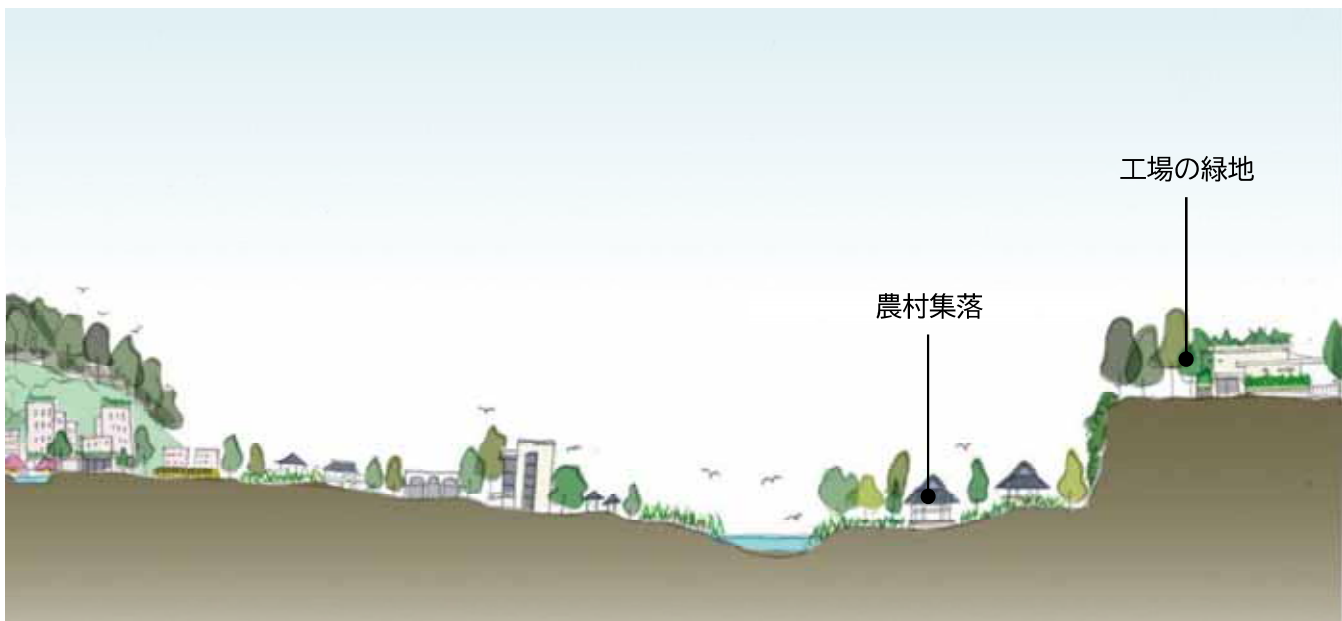
宇都宮市には、日光連山から続く山林が北西部に位置し、そこから市の中心部に宇都宮丘陵が延びています。丘陵の南端部に位置する宇都宮二荒山神社の周辺には門前町が築かれ、後に宇都宮城の城下町として栄えることとなり、現在の市街地へと発展しました。また、市内を南北に流れる鬼怒川、田川、姿川等の河川沿いの低地には、豊かな農地が広がっています。

このように、宇都宮市の緑は、山林と、山林から中心市街地へと楔を打ち込むように延びる丘陵の樹林、市街地を囲むように低地に広がる農地によって大きな骨格が構成されています。





宇都宮市の緑の構造



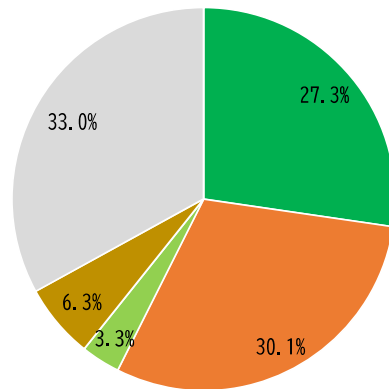
3 緑被の状況

全域において、令和2年度現在の緑被面積※は27,942.6haで、緑被率は67.0%となっています。

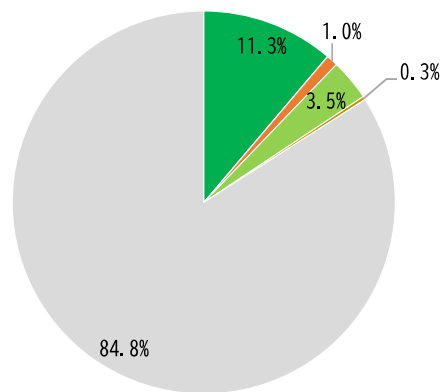
緑の区分内訳で、農地の面積が12,572.9haと最も多く、市域の30.1%を占めています。樹林地は11,373.9ha(27.3%)となっており、農地と合わせて市域の約6割を占めています。樹林地は北西部の山地から宇都宮市丘陵の長岡、戸祭山、八幡山公園に至る一帯に、農地は、東部の鬼怒川沿い及び、姿川、田川沿いに広がっています。

※緑被面積：市街化区域内では100㎡以上、そのほかの地域では1,000㎡以上のまとまりのある緑を対象としました。

中心市街地においては、区域北部の八幡山公園の樹林、中心部にある二荒山神社の樹林、宇都宮城址公園の地被類などにとどまり、緑被率は15.2%と低い状況となっています。



■樹林地 ■農地 ■地被類 ■その他 ■緑被以外
市域全域の区分別緑被割合



■樹林地 ■農地 ■地被類 ■その他 ■緑被以外
中心市街地の区分別緑被割合



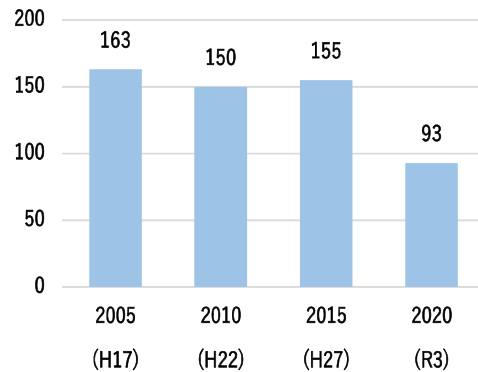
写真は仮

4 種別の緑の状況

山林・樹林

- ・自然公園や保安林，風致地区等の地域性緑地の指定により，山林，樹林地が保全されている一方，林業経営体は平成 22 年（前計画策定時）から約 6 割に減少しました。

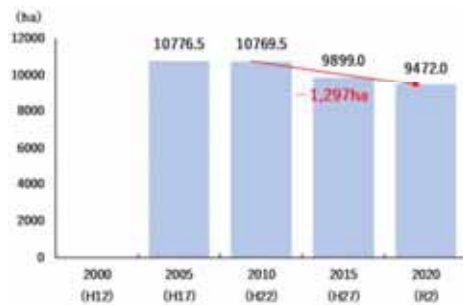
(経営体)



林業経営体の推移

農地

- ・市街地周辺の河川沿いに農地が広がっており，低地は主に水田として，台地は主に畑地や果樹園として利用されています。
- ・令和 4（2022）年より，緑豊かな都市環境の形成や都市における貴重な緑空間の保全等に向け，NCC のまちづくりと連携しながら市街化区域内の農地（都市農地）の適切な保全を図る「生産緑地制度」を導入しました。



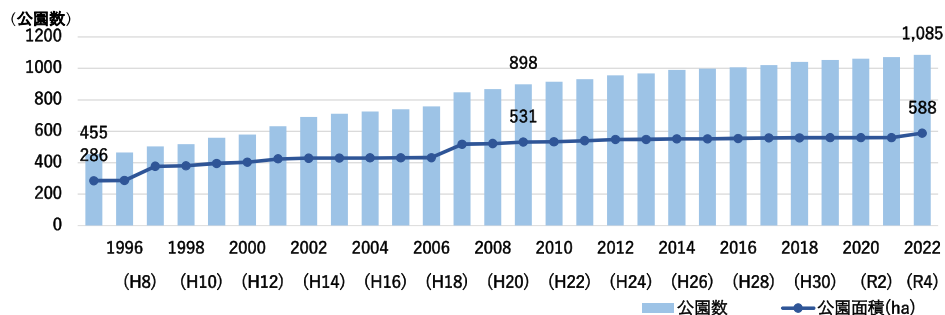
宇都宮市の経営耕地面積の推移
出典：宇都宮市統計書



ろまんちっく村での農業体験の様子

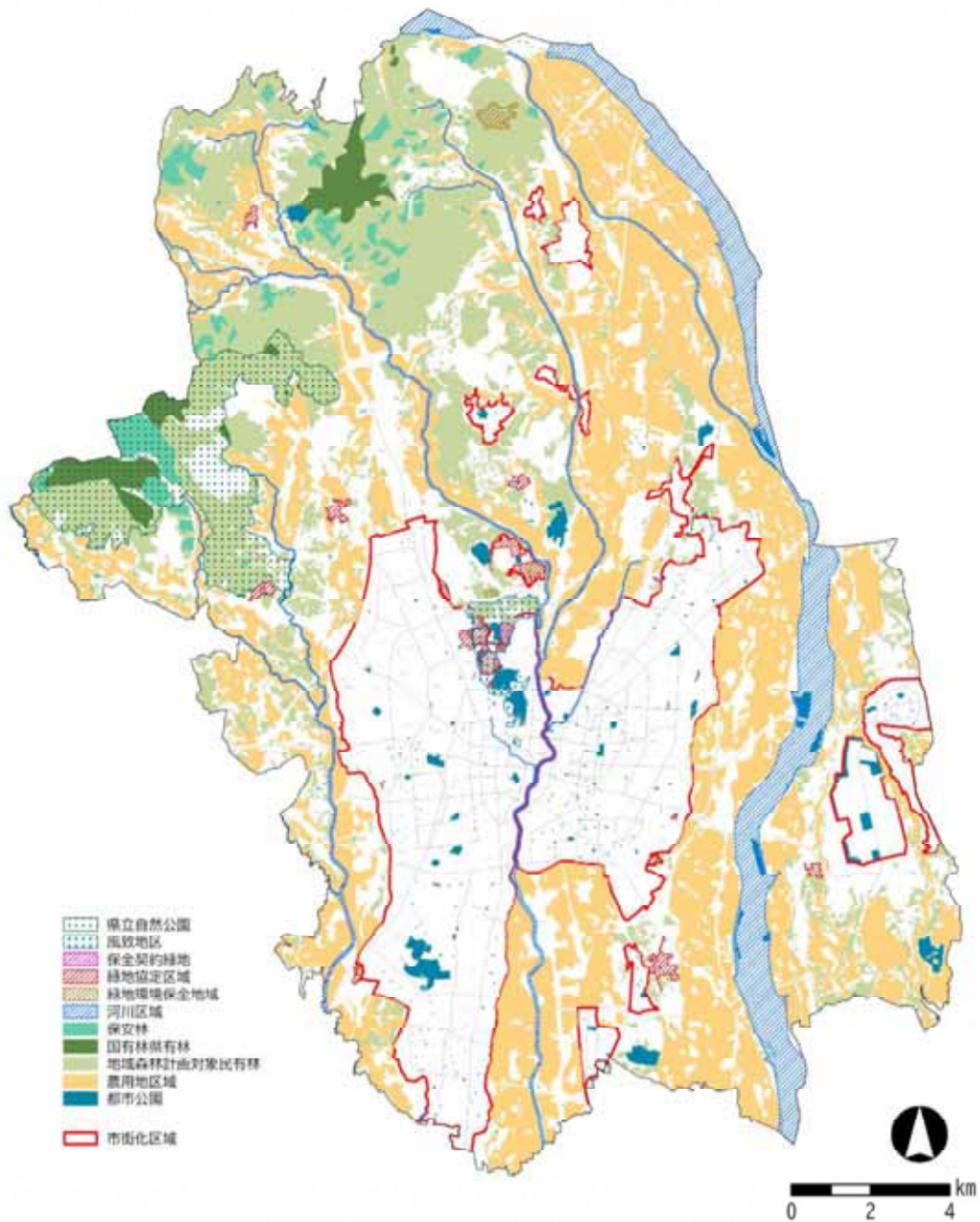
公園

- ・令和 4 年（2022）年 4 月現在の市内の都市公園箇所数は 1085 箇所，総面積は 587.56ha で，市民一人当たりでは 11.4 m²/人となっています。県総合運動公園や戸祭山緑地，土地区画整理事業による新規公園などが開設し，一人当たりの公園面積が増加しました。



公園面積・箇所数の推移

大区分	中区分	小区分
施設緑地	都市公園	
	都市公園以外	
地域制緑地等	法による地域	風致地区
		自然公園
		農用地区域
		河川区域
		保安林区域
		地域森林計画対象民有林
		国有林・県有林
	史跡・名勝・天然記念物など	
	協定	緑地協定
	条例等によるもの	条例・契約・協定等



地域制緑地等の状況

道路緑化

- ・シンボルロードや、中央通り沿いのトチノキ、日光街道沿いの桜並木など、街路樹が良好な道路景観を形成しています。
- ・下枝等の剪定を適宜行う等安全な道路通行空間を確保しながら、樹種に合わせた樹形管理、老木化したサクラの植え替え、立枯れした街路樹の伐採など、適切な維持管理を実施しました。



都市部の緑の問題・困っている点（回答数上位5項目）

- ・しかし、市民アンケートでは、トチノキの落ち葉や実の害、根上がりによる歩道持ち上げ等が問題点として挙げられているほか、中心市街地における街路樹の適切な配置を求める意見も多く、暮らしやすく魅力ある都市空間の形成やウォーカブルなまちづくりを推進していく上での課題も生じています。

市民協働による緑の保全・創出の取組

- ・市街地においては、宇都宮市花と緑のまちづくり推進協議会は、市や学校、企業等と連携しながら、ハンギングバスケットやプランターの設置等を行っています。
- ・地域住民はもちろん、市内外からの来訪者など、多くの人が行き交うまちなかにおいて、市民・事業者・行政のパートナーシップによる緑を増やす取組がJR 宇都宮駅や東武宇都宮駅周辺を中心に広がっています。
- ・公益財団法人グリーントラストうつのみやは、市内4か所の緑地（長岡樹林地や鶴田沼緑地、戸祭山緑地、海道小北樹林地）で、各ボランティアグループが下草刈りや落ち葉さらいなどの樹林地の保全、昆虫観察会や木材の収穫体験といった自然学習や体験活動支援、トウキョウサンショウウオなどの動植物のモニタリング調査等を実施しています。



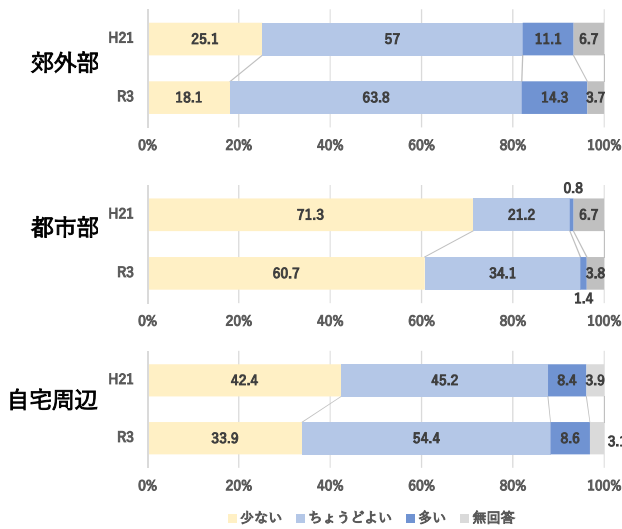
シンボルロードのハンギングバスケット



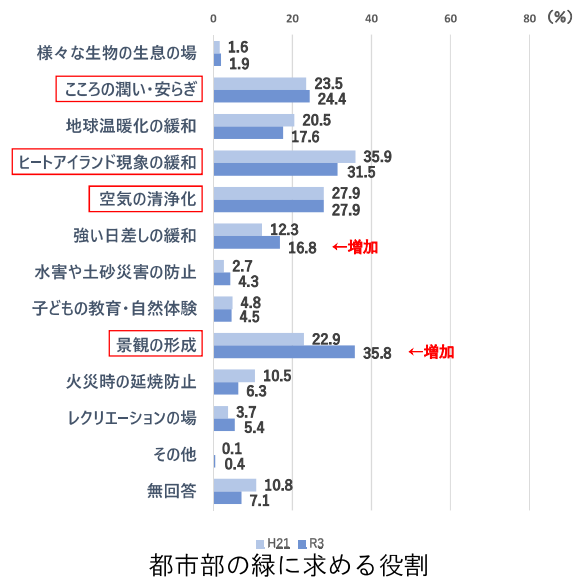
高校生によるプランターの設置

市民意識

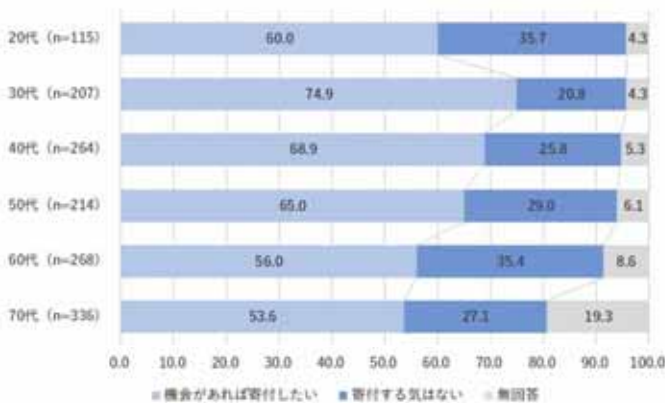
- ・現在の緑の量への満足度について、郊外部，都市部，自宅周辺いずれも「少ない」と感じる人が減少し、「ちょうどよい」が増加しました。
- ・都市部の緑に求める役割として、「景観の形成」，「ヒートアイランド現象緩和」，「空気の清浄化」，「こころの潤い・安らぎ」に対する回答が特に高く得られました。また，平成 21 年と比べて，「景観の形成」，「強い日差しの緩和」を求める回答が特に増加しました。
- ・緑に関する事業について，緑化ボランティア養成講座，緑化講習会に対する参加意向は平成 21 年と比べて減少しています。その一方で，都市緑化基金・緑の募金等の緑に関する募金への参加意向については「機会があれば寄付したい」と回答した市民が全世代において 5 割を超えています。
- ・公園に求める役割として，「散歩や散策等の場」，「子どもの育成の場」，「遊び・運動の場」に対する回答が多く得られました。



現在の宇都宮市の緑の量に対する満足度



都市部の緑に求める役割



年代別の緑に関する募金への意欲



公園に求める役割

5 機能別にみる緑の状況

緑が持つ多様な機能を活かし、スーパースマートシティへ貢献するため、本市の緑について地域振興、環境などの視点から整理しました。

(1) 都心部の活性化

今後、都心部の活性化を図っていくエリアとして、「都心部まちづくりビジョン」の対象エリアに着目し、回遊空間としての緑の状況を分析しました。

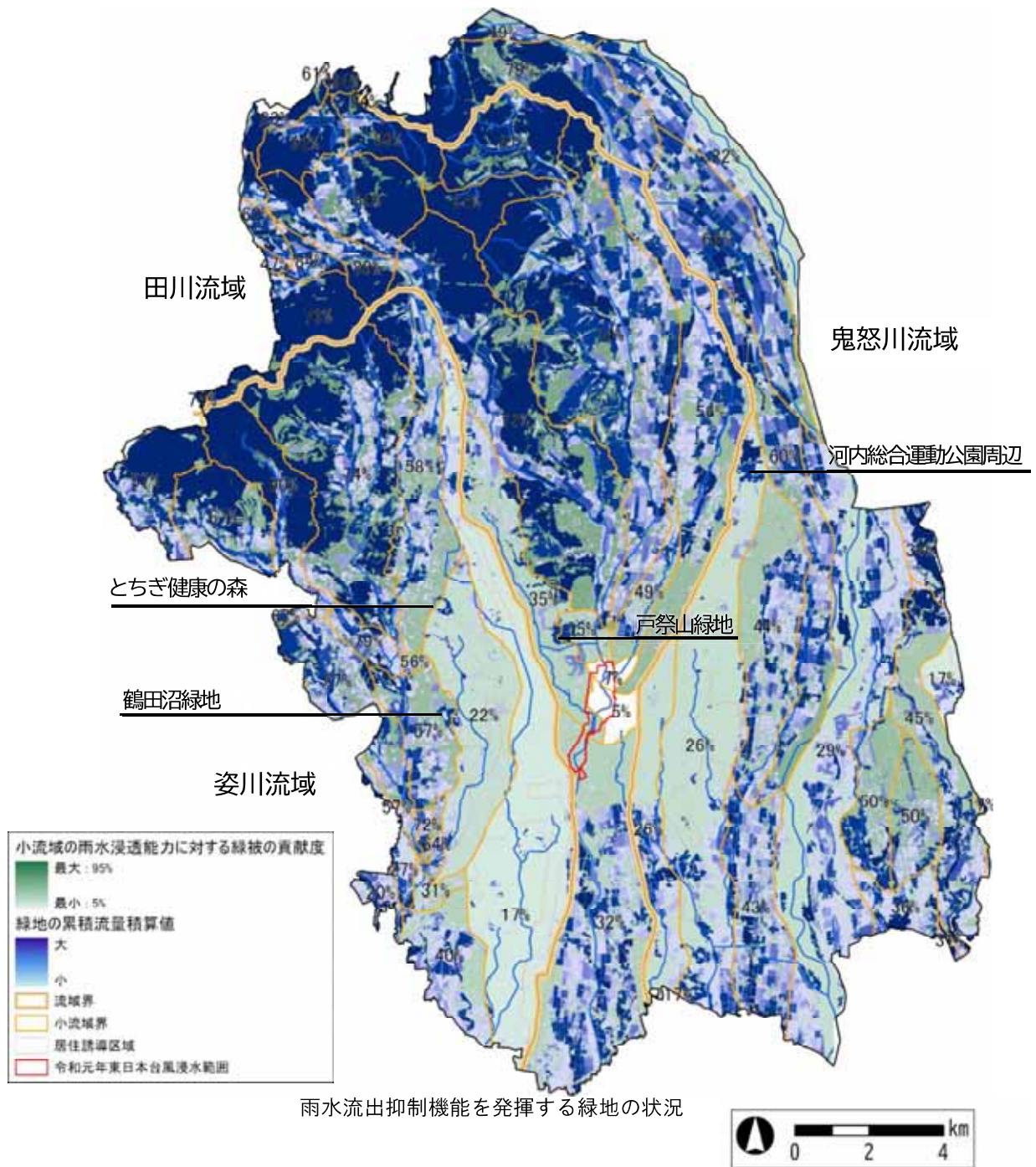
都心部において通行人口の多い通り沿いやウォーキングマップ、自転車マップのルート沿いでは、街路樹の整備やハンギングバスケットの設置などにより、花や緑を感じられる快適な回遊空間が形成されています。一部区間で緑が配置されていない通りも存在していますが、こうした通りは、道路幅員が狭く地上部分における緑化余地が十分ではありません。



※「令和2年度土地利用現況調査」において、「平面駐車場」「建物跡地、資材置場、改変工事
中の土地、のり面（道路、造成地等の主利用に含まれないのり面）」に分類された土地

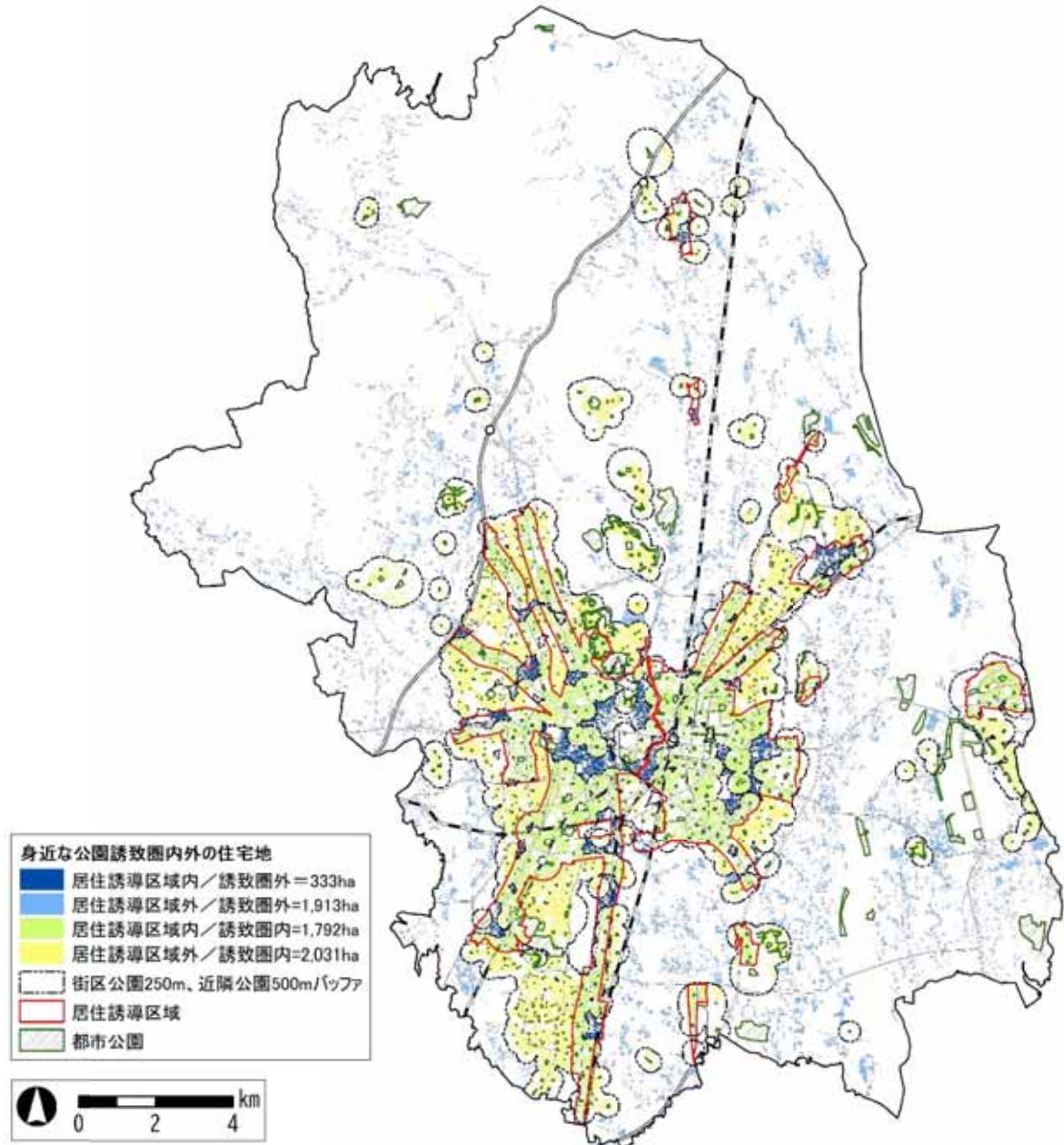
(2) 雨水の貯留浸透による災害リスクの軽減

山林等が広がる上流部では、流域内の雨水浸透能力の多くを緑被が賄っており、中流・下流域に位置する市街地等での災害リスクの軽減に貢献しています。一方、市街地自体の緑被の貢献度は低い状況にあり、災害リスクの軽減に向けて、緑地整備や緑化による雨水貯留・浸透能力の向上が必要です。その中で戸祭山緑地等の丘陵部や鶴田沼緑地、とちぎ健康の森等のまとまった樹林は、累積流量が高く（多くの表流水を集水する）、市街地の雨水被害の抑制に大きく貢献しています。



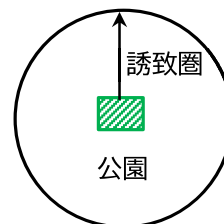
(3) 地域コミュニティ・子育て・健康福祉の向上

地域交流等の場となる身近な公園の分布状況を示しています。身近な公園に歩いていくことのできる距離内（誘致圏）に公園が無い住宅地は、市内に約 2,200ha 存在し、その内居住誘導区域内には 333ha（図中、濃青色）存在しています。



誘致圏とは、圏内の在住者がその公園の利用者として想定される範囲のことである。

近隣公園の誘致距離：500m
街区公園の誘致距離：250m

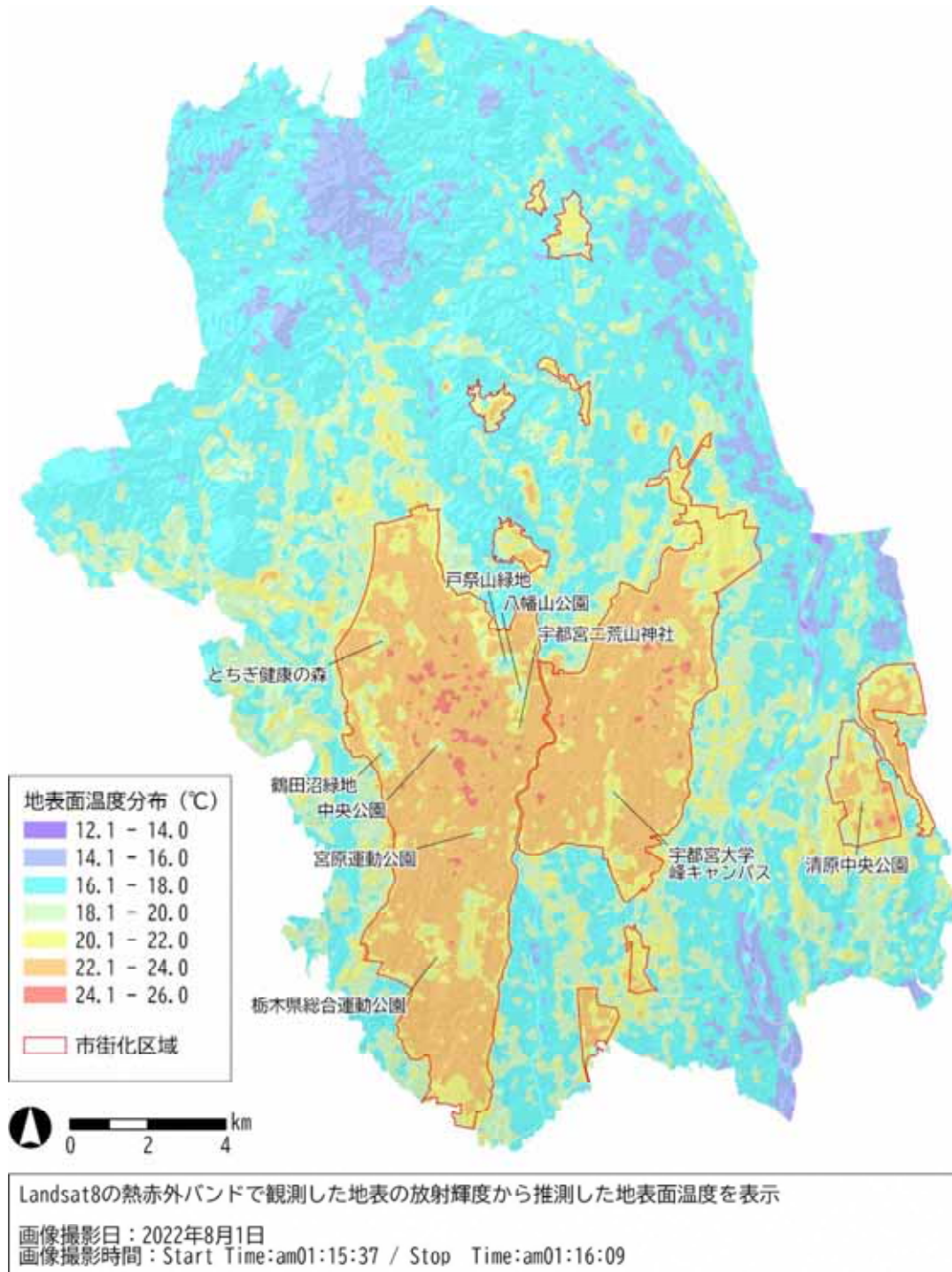


身近な公園の分布と誘致圏の状況

(4) ヒートアイランド現象の緩和

ランドサットの衛星画像から、宇都宮市の中心市街地における地表面温度分布（2022年8月1日）を分析しました。

市街化区域内は比較的高温域が広がっており、熱帯夜と呼ばれる25℃以上を示す場所も散見されますが、一方、戸祭山緑地、八幡山公園、宇都宮二荒山神社、鶴田沼緑地等ではクールスポットが形成されています。

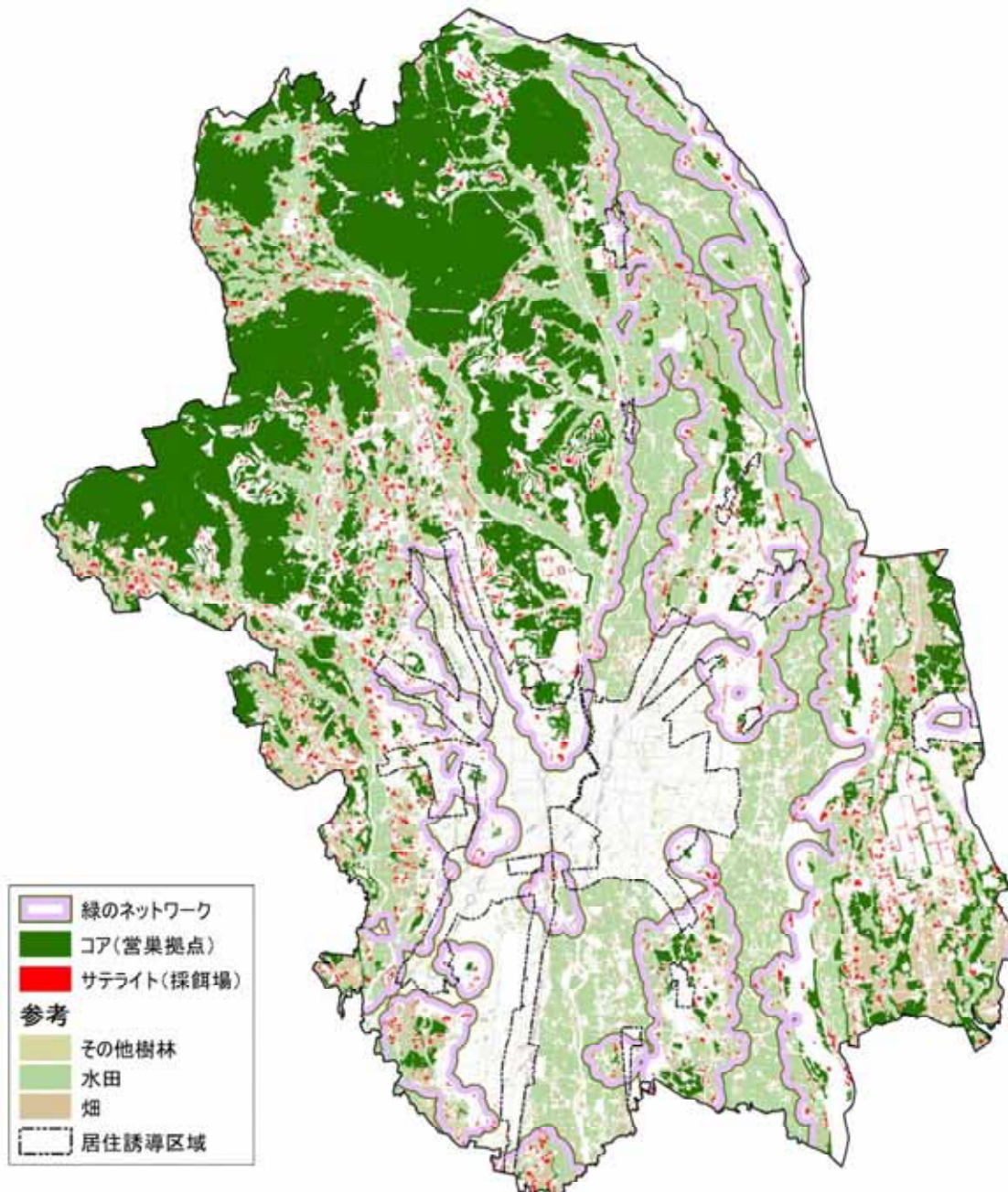


ヒートアイランド現象の状況

(5) 緑のネットワーク

都市型鳥類であるコゲラを指標とする緑のネットワークを分析すると、八幡山公園や二荒山神社など、市街地近傍の大規模な緑地によって、北部の豊かな緑が、中心部まで連続しています。市街地付近に小規模な樹林地が残っていることで、居住地まで緑が続く要因になっていることが分かります。

市の中心部では南側と東側で特に、緑のネットワークが途切れている状況です。



【分析図】
市域のエコロジカルネットワーク分析において用いられることの多いコゲラを指標種として、営巣拠点・採餌場となる樹林を抽出し、これらの中でコゲラが移動すると想定される範囲をネットワークとして表示

6 前計画の目標達成状況

緑の量を測る緑被率，緑視率，緑地率は，前計画策定時から概ね横ばいで推移してきました。また，開発行為等によって民有地の緑や農地が減少するなか，目標値には届かなかったものの都市公園など都市部の緑は前計画から増加しました。

緑の量への満足度は，都市部，郊外部ともに目標値を上回りましたが，都市部の緑の量に満足している市民は，未だ約3割にとどまっています。

指標	初期値	目標値 (R)	現状値
緑被率	市域全域 63.2 (H)	初期値を維持	67.0 (R1,2)
	中心市街地 10.1 (H)	初期値以上	15.2 (R1,2)
緑視率	14.1 (H2)	20%	14.3 (R)
緑地率	市域全域 54.6 (H)	初期値を維持	53.4 (R)
	市街化区域 11.2 (H)	17.6%	10.7 (R)
市民一人当たりの 都市公園面積	10.44 (H2)	13㎡/人	11.42 (R)
緑の量に満足して いる市民の割合	都市部 21.2 (H2)	28%	34.1 (R)
	郊外部 57.0 (H2)	60%	63.8 (R)
	自宅周辺 45.2 (H2)	50%	54.4 (R)

7 計画改定の課題

緑が有する多様な機能の発揮を通じてスーパースマートシティの実現に貢献するため、今後、以下に示す課題に対応していくことが重要です。

課題1 本市を象徴する緑の保全・活用

① 市街地を囲む山林、丘陵地、農地、河川の保全・活用

- ◆今日的な課題の解決に貢献する多様な機能が発揮されるよう、引き続き、法律や条例等に基づく開発規制等によって保全を図ることが重要です。
- ◆担い手の減少・高齢化が進む中で、市民や企業等による保全活動を、積極的に推進していくことが重要です。

② 歴史・文化的な緑の保全・活用

- ◆歴史・文化的な緑を、まちづくりに生かしてその価値を発信し、次世代に引き継いでいくことが重要です。

課題2 持続可能な社会の形成に向けた緑の多様な機能の発揮

① 緑の活用を通じたまちの居心地の良さの向上

- ◆本市の魅力増進につながる市街地の緑の充実と多様な自然とのふれあいを推進することが重要です。
- ◆都市機能を集約する上では、近年激甚化、頻発化する災害のリスクを軽減し、強靱性の確保につながる山林・農地の保全と市街地の緑の配置が重要です。

② 健康づくり・交流・自然とのふれあいの場の提供

- ◆地域ニーズに応え、子育てや健康づくりの場となる身近な緑をつくるため、地域住民の意見を捉えながら整備、維持管理を進めていく仕組みが重要です。
- ◆市街地に近い場所に自然が位置する本市の強みを生かし、市街地外縁部の樹林地や農地を日常的に利用できる公開性のある緑としていくことが重要です。
- ◆公園や道路、河川沿い、駅前など様々なオープンスペースを、企業やまちづくり団体等と連携し、憩いや交流、賑わいの場としていくことが重要です。

③ 緑の保全・創出を通じた環境負荷の低減

- ◆山林等を確実に保全するとともに、温室効果ガスを多く排出する市街地では緑の創出によるエネルギー消費の軽減、緑陰形成等によるヒートアイランド現象の緩和につなげるのが重要です。
- ◆多種多様な自然環境を保全し、生物多様性を確保するとともに、市街地では社寺や公共の緑を生かし、街路樹や個々の緑をつなげていくことが重要です。

課題3 原動力となる公民連携・デジタル活用の推進

①企業等多様な主体が連携した緑の保全・活用・創出

- ◆これまで本市の緑づくりに大きな役割を果たしてきた市民活動を引き続き支援するとともに、活動の拡充や水平展開を検討することが必要です。
- ◆公（市）と民（地域、民間企業等）の連携、エリアマネジメントやまちづくり団体との協働等、多様な主体が緑の保全・活用・創出に関わる取組が重要です。

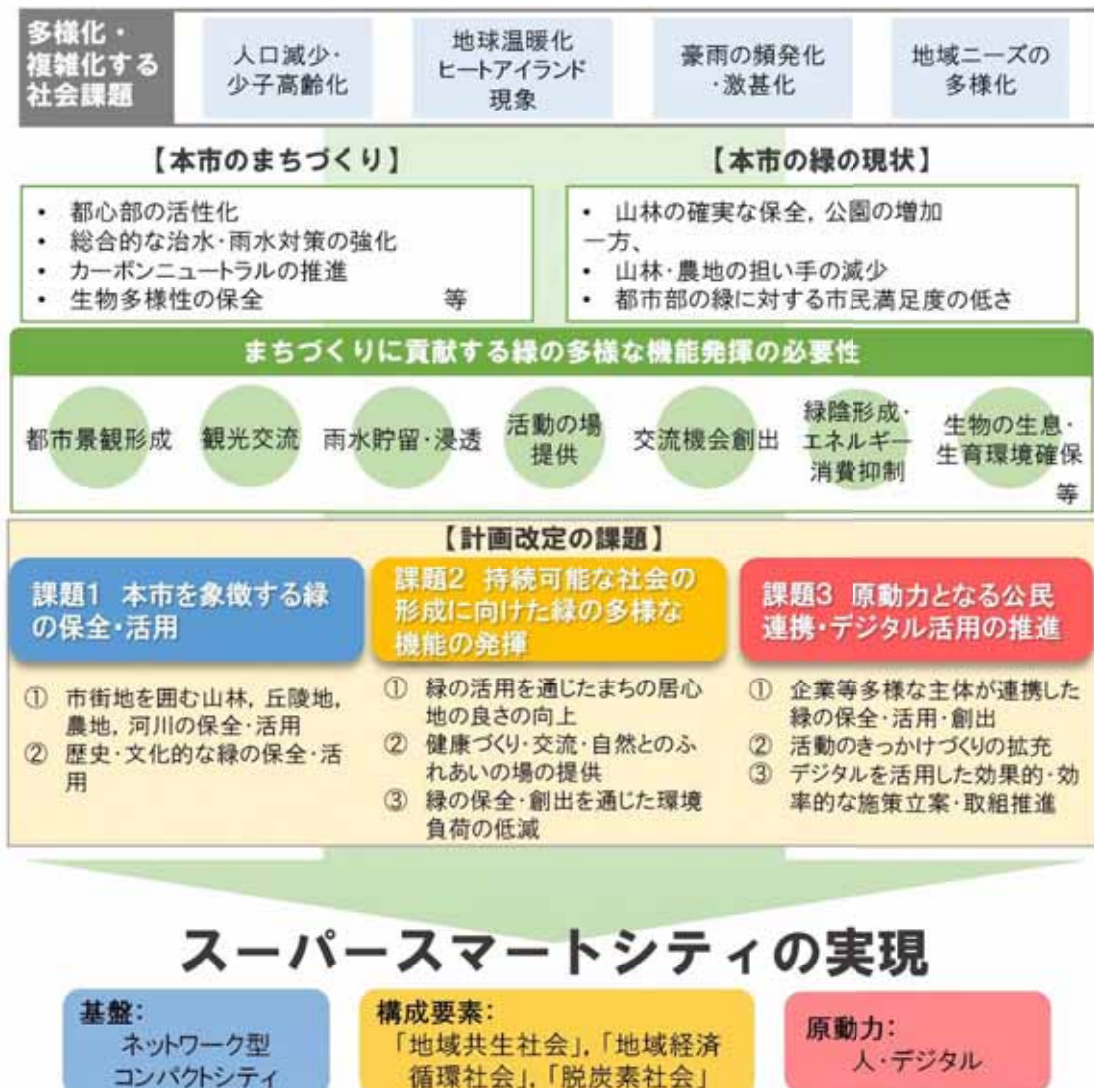
②活動のきっかけづくりの拡充

- ◆活動団体の高齢化が進む中、活動を通じて新たな交流や活動場所への愛着が生まれるような仕掛け等、若い世代等が気軽に参加できる工夫が重要です。
- ◆働き盛り世代など忙しく具体的な活動に参加できない人々も、活動以外の形態で、緑づくりに関わることができる機会や仕組みの検討が重要です。

③デジタルを活用した効果的・効率的な施策立案・取組推進

- ◆AIやIoTを活用することで、取組効果の高い場所と手法を即地的に分析し、メリハリをつけて施策を進めることが重要です。

<計画推進の課題>



第 2 章 基本概念

第2章 基本理念

1 基本理念

本市の緑のまちづくりに関わる全ての人々が共有し、同じ方向を向いて取組を進めていくための羅針盤として、「宇都宮市の緑の取組はいかにあるべきか」を基本理念として示します。

『基本理念』

人とみどりがつながり 地域のかたちを彩る



写真は仮

住まう、働く・学ぶ、憩う等の都市活動の要素を、地域の特性に応じて配置し、連携・補完しながら、誰もが安心して暮らせるまちの実現を目指す。これが、新しい時代の宇都宮市のまちづくりの特徴です。

二荒の森が今も昔も人々の心の拠り所となっている中心市街地、郊外のそば畑や平地林、桜つつみ等、緑が風景の一部である地域拠点、山林でのアクティビティや特異な景観が人々を魅了する観光拠点など、様々な性格の地域はいずれも、緑が身近に存在しています。

緑は、潤いある景観形成によって魅力的で賑わいある空間を創出し、雨水の流出を抑制しまちの強靭性を確保します。さらに人々の憩い・子育て・健康づくりの場を提供し、花・緑づくりを通じて様々な交流を促します。また生き物の暮らしの場になるとともに、温室効果ガスの吸着を通じて環境負荷の少ない都市を実現します。

こうした緑の機能は、地域に暮らす人々自身が、地域でどのように緑を生かしていくかを模索し、互いに連携しながら、緑の保全・活用・創出に取り組むことで、発揮されていきます。

永い歴史の中で緑に包まれながら成長してきた本市は、多くの人が緑との関わり合いを持ち続けることで、地域の特性に応じた緑の機能の発揮につなげ、地域の魅力を創出していきます。

こうした認識のもと、緑のまちづくりの基本理念として、「人とみどりがつながり 地域のかたちを彩る」を掲げます。

2 多様な主体の参画による緑のまちづくり

緑の機能を、スーパースマートシティの実現に向けた様々な場面での確に発揮していくためには、まちづくりに関わる多様な主体が、緑のまちづくりのビジョンを共有し、それぞれの役割を担い、連携し、持続的に取り組んでいく必要があります。

- ・緑を愉しみ、生活に取り入れる
- ・暮らしの中で、緑の取組に気軽に関わる

- ・専門分野を生かして緑の取組を展開する
- ・若い世代をはじめ、幅広い市民に発信する



- ・民間の柔軟なアイデア、資金、技術等を緑の取組に提供する
- ・まちの一員として、緑化・緑地保全に取り組む

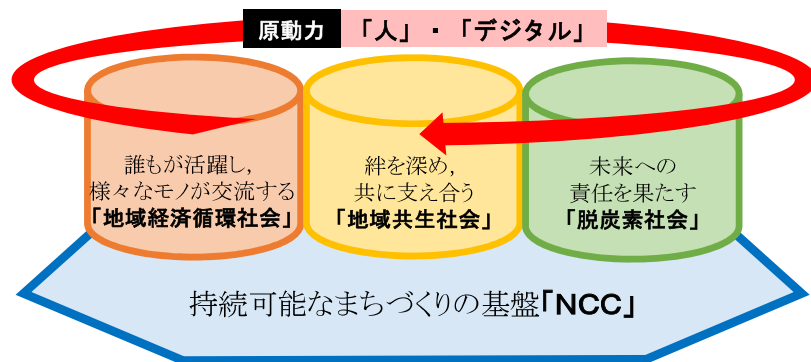
- ・緑の基本計画に基づき、計画的に取組を進める
- ・様々な主体の連携を促進、支援する

写真は仮

3 スーパースマートシティと緑

スーパースマートシティとは

宇都宮市が実現を目指す「スーパースマートシティ」は、ネットワーク型コンパクトシティの都市構造を土台として、人とデジタルを原動力に、地域住民の絆を深め、共に支え合うことができる「地域共生社会」、誰もが活躍し、多種多様なモノが交流する「地域経済循環社会」、二酸化炭素排出量を実質ゼロとし、未来への責任を果たす「脱炭素社会」の3つの社会の構築を進めていくものです。



スーパースマートシティの実現への緑の貢献

スーパースマートシティの実現に向けて、緑の多様な機能は、様々な形で貢献することができます。土台である「ネットワーク型コンパクトシティの形成」に向けて、市街地を包むように広がる山林や農地があることで、都市活動と自然との触れ合いの両立を実現することができます。

「地域経済循環社会」の形成に向けて、緑があることで、人々が活動する都市空間をより居心地の良いものにすることができます。「地域共生社会」の形成に向けて、緑は、子どもから高齢者まで様々な人の交流の場を提供することができます。「脱炭素社会」の形成に向けて、緑は、植物作用を通じて、エネルギー消費を軽減し、温室効果ガスを吸着します。

このように緑は、宇都宮の来を実現していく上で必要不可欠な要素です。

写真は仮

地域経済循環社会 の形成

- ・都市の資産価値向上
- ・安全安心，強靱性確保

潤いある都市景観の形成



自然を生かした観光交流



雨水の貯留・浸透



地域共生社会 の形成

- ・健康福祉，子育て，教育
- ・地域コミュニティの醸成

活動の場の提供



交流機会の創出



脱炭素社会 の形成

- ・環境負荷の軽減
- ・生物多様性の保全

緑陰形成，エネルギー消費抑制



生物の生息・生育環境形成



本市が目指す3つの社会の形成に向けた緑の機能発揮

グリーンインフラの特徴と意義

① 機能の多様性

- ・ 自然環境が有する多様な機能を活用していく取り組みです。
多様な機能の例：生物の生息・生育の場の提供，雨水の貯留・浸透による防災・減災，水質浄化，水源涵養，植物の蒸発散機能を通じた気温上昇の抑制，良好な景観形成，農作物の生産 等
- ・ こうした機能は，個別の施設にとどまらず，エリア全体の資源や空間を活かすことで，より効果的・多面的に機能を発揮することが期待されます。

② 多様な主体の参画

- ・ 多様な機能を活用していくことから，地域住民との協働や民間企業との連携により，多様な主体が関与することが期待されます。
- ・ 様々な人がグリーンインフラの取組に関わることで，コミュニティの形成や，外出機会の創出による心身の健康増進も期待されます。

③ 時間の経過とともにその機能を発揮する

- ・ グリーンインフラの機能は，植物の生育など時間の経過とともに変化する特徴があります。
- ・ したがって，適切にマネジメントする必要があるため，地域住民等の多様な主体が参画して，持続的に維持管理していくことが期待されます。



○ 防災・減災や地域振興、生物生息空間の場の提供への貢献等、地域課題への対応

○ 持続可能な社会、自然共生社会、国土の適切な管理、質の高いインフラ投資への貢献

グリーンインフラの考え方

出典：国土交通省資料

